重 複 癌

重複癌の2例

今井 俊哉*¹ 中山 恵二*¹ 三神 寛*¹
中村 進一*¹ 渋谷 哲男*² 五十嵐文夫*³

Summary

症例 1: 66歳, 男性。6年前より息切れがあり, 肺線維症として経過観察中, 3年前より左下腿に皮疹が出現。近医にて全摘出術をすすめられるも放置していたところ増大傾向あり, 最近息切れが増強したため入院し, 胸水穿刺の結果 class V, adenocarcinoma あるいは small cell carcinoma。皮疹は皮膚生検の結果 SCC であった。

症例 2: 70歳, 男性。3年前より外陰部に掻痒感があり, 近医にて慢性湿疹として外用療法受けるが軽快せず当科紹介。皮膚生検施行後, 乳房外 Paget 病と診断。術前検査施行中貧血に気づかれ, 胃生検の結果, group V, adenocarcinoma。

以上, 重複癌の2例を報告するとともに, 統計的観察を加えた。

緒 言

皮膚悪性腫瘍と他臓器癌の合併に関しては, 従来より, Bowen 病, 乳房外 Paget 病にその合併が多いとされている¹⁾²⁾。

われわれは, 乳房外 Paget 病に胃癌を合併した症例と, 他臓器癌の合併が比較的まれとされている有棘細胞癌に, 肺癌を合併した症例を続けて経験したので, あわせて報告する。

症 例

症例 1: 66歳, 男性

*1 Toshiya IMAI, Keiji NAKAYAMA, Hiroshi MIKAMI, Shinichi NAKAMURA: 日本医科大学附属第一病院皮膚科

*2 Tetsuo SHIBUYA: 日本医科大学第二外科学教室

*3 Fumio IGARASHI: 東京健生病院内科

初 診: 昭和61年7月21日

家族歴: 父, 胃癌, 母, 脳血管障害にて死亡。兄弟に肺結核。

既往歴: 11年前, 慢性肝炎, 心房細動。

現病歴: 6年前より息切れがあり, 肺線維症として経過観察中, 3年前より左下腿に腫瘤が出現。近医にて, 全摘出術をすすめられたが放置していたところ漸次増大してきた。最近, 咳嗽, 喀痰および体動時の息切れが増強したため, 精査目的で入院し, 内科主治医に左下腿の腫瘤に気づかれ, 当科を訪れた。

現 症: 左下腿前面に 15×15 mm の不整形, 表面に痂皮を伴ったびらん面を認め, 周囲には, 紅斑および褐色の色素沈着を有している(図1)。

病理組織学的所見: 有棘細胞様の腫瘍細胞が, 真皮内へ浸潤する。腫瘍細胞には, 異型性, 核分裂像を認め, また, 癌真珠は形成されず, 個立性角化が認められる(図2)。

図 1.

図 2.

図 3.

図 4.

胸部X線所見：両肺野に肺線維症を思わせるスリガラス様陰影を呈し、また右下肺野に腫瘤陰影を認めた(図3)。肺癌を強く疑い経気管支的肺生検を試みたが、有力な所見が得られず、胸水穿刺を施行した。

細胞診：N/C 比の 高い異型細胞の重積がみられ、胞体内にわずかに粘液らしきものを認める。class V, adenocarcinoma あるいは, small cell carcinoma と考えられた(図4)。

治療および経過：肺癌診断確定後, endoxan, adriamycin などによる化学療法を開始。患者・主治医の希望により、左下腿の有棘細胞癌を全摘したが、その後 DIC, 肺炎を併発し、昭和62年1月3日死亡した。

症例 2：70歳, 男性

初 診：昭和61年9月17日

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：幼小児期より肺結核, 肺線維症, 気管支拡張症, 肺気腫。

現病歴：3年前より外陰部に掻痒感を伴う皮疹が出現し、近医にて慢性湿疹として外用療法を受けていたが軽快せず、当科を紹介されて受診した。

現 症：陰茎基部左側より、陰囊左側にかけてびらん面を認め、その周囲に不整形、表面湿潤性で、皮膚面より扁平に隆起する褐色、一部黒色の色素沈着を伴う局面をみる(図5)。陰囊両側には、類円不整形の色素脱失局面を認め、左側ではその内部および辺縁に褐色の色素沈着がみられる。

図 5.

図 7.

図 6.

図 8.

病理組織学的所見：表皮内に大型，類円形，淡染性で明るい細胞質をもつ Paget 細胞が，集合して胞巣を形成している（図 6）。

血液・生化学的所見：赤血球 $420 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，Hb 7.9 g/dl，Ht 28.9% と貧血を確認した。

胃透視：胃角部大彎側に，周堤によって囲まれる。不整形の潰瘍を認める。Borrmann II 型の胃癌を疑い内視鏡検査を施行した（図 7）。

内視鏡検査所見：胃体下部より，前庭上部の前壁から大彎にかけて，不整形，鶏卵大の深い潰瘍を認め，全周性に高い周堤が形成され，硬い印象を与える（図 8）。

胃生検所見：変性壊死性物中に，大小不同，

クロマチンの増量した核を有する異型細胞の増殖がみられ，わずかに腺腔形成傾向を認める。group V, adenocarcinoma と考えられた（図 9）。

治療および経過：本症例は，患者が胃癌の手術を強硬に拒否したため，胃癌，乳房外 Paget 病とも手術せず，外科外来にて経過観察中である。

考 案

乳房外 Paget 病において，他臓器癌の合併する頻度は，表 1 に示すごとくであり，おおむね

図 9.

表 1. 乳房外 Paget 病と他臓器癌の合併

1. 頻度	12% (6/48) 宮里, 1984 ¹⁾ 17.7% (11/62) 池田, 1984 ³⁾ 14.3% (4/28) 石原, 1985 ⁴⁾
2. 年齢	41~83歳 平均70.2歳
3. 性	男:女 3:1
4. 他臓器癌	胃癌, 直腸癌 各6例 膀胱癌, 肝癌 各4例 前立腺癌, 結腸癌 各3例 肛門癌 2例 舌癌, 食道癌, 脾癌, 乳癌, 肺癌, 子宮頸癌, 腎盂癌, 睾丸肉腫 各1例

15%内外と思われる。1984年までに池田ら³⁾は30例を集計しており, 1985年, 石原⁴⁾は自験例3例を報告, 以上と本症例を合わせ計34例についてみると, 患者の平均年齢は70.2歳, 男女比は3対1と男性に多く, 合併した他臓器癌の臓器別では, 胃癌, 直腸癌各6例と多く, 次いで膀胱癌, 肝癌各4例であり以下表1のごとくであるが, 全体として消化器癌が多いといえる。

有棘細胞癌と他臓器癌の合併に関する報告は少なく, 1986年石原⁵⁾は, 自験例367例中6.5%にあたる24例を報告しているが, 最近5年間のその他の報告は, 自験例を含め2例⁶⁾のみで, それらの集計によると, 平均年齢は58.9歳, 男女比は約3対2と男性に多く, 他臓器癌の臓器別では胃癌8例と多く, 次いで肺癌, 甲状腺癌, 各4例となっている(表2)。

表 2. 有棘細胞癌と他臓器癌の合併

1. 頻度	6.5% (24/367) 石原, 1986 ⁵⁾
2. 年齢	38~84歳 平均58.9歳
3. 性	男:女 約3:2
4. 他臓器癌	胃癌 8例 肺癌, 甲状腺癌 各4例 子宮癌 3例 大腸癌 2例 喉頭癌, 食道癌, 直腸癌, 白血病, 乳癌, 悪性リンパ腫 各1例

文 献

- 1) 宮里 肇: Paget 病. 臨床老年医学, 14: 170-174, 1984.
- 2) 宮里 肇: Bowen 病. 臨床老年医学, 14: 159-161, 1984.
- 3) 林原義明, 増田哲夫, 斉藤公子, 池田重雄, 岡田耕市: 膀胱癌患者にみられた外陰部 Paget 病. 医薬の門, 25: 69-74, 1985.
- 4) 石原和之: 皮膚癌と重複癌. 最新医学, 40: 1675-1685, 1985.
- 5) 石原和之: SCC にみられた重複癌. 皮膚病診療, 8(11): 1067-1071, 1986.
- 6) 幸田 衛, 武井洋二: 重複癌—皮膚扁平上皮癌と肺小細胞性未分化癌. 日皮会誌, 94(2): 173, 1984.